

生命の實相

第1卷

總説篇・實相篇「上」

(126)

もしピー・ハワード夫人がその汽車に乗って汽車の転覆にあつて重傷を負うているような事件を正確な靈覺とか靈夢によつてハッキリ目撃したのでありましたら、その事件は「念の境界」ではすでに起こりずみであるからこそ見えたのでありますから、夫人がいくら、それを避けようと努力しても、どうしても拒まれない事情が発生してその汽車に乗ることになり、その汽車は転覆して予知したとおりの危害を避けることはできないのであります。ここがわれわれにとって最も注意を要する肝要な所で、われわれが未来の不幸を避けるためには、その不幸を予知する靈感などをいくらかもつていてもなんの役にも立たないのであります。予知された未来はすでに起こりずみであるからそれを取り消す道がない。それを取り消そうとあせるのは活動写真の映写機に一定の事件のフィルムをかけて活動写真を写しながら、舞台面の映画を消しゴムで消そうとするのと同じ愚であります。現実世界という舞台面にこんな事件が映つてはいかぬと思うならば、「念のフィルム」にそんな事件を撮影しておかぬがよろしい。他のひとびとが集まつてそういう事件の「念のフィルム」を合作しそうであったら自分だけ「類でないものは反発する」という法則によつて、そのフィルムに入らなければよろしいのです。「類でないものは反発する！」これこそわれわれが悪運を避ける唯一の法則であります。悪い事件が映つ

ている「念のフィルム」に自分だけ映るまいと思ふならば、自分の生命に、その悪い事件と親和し、互いに引き合うようないろいろの心持ち——暗い心持ちとか、鋭い心持ちとか、心で人を刺す性質とか、窮屈で人をいれない性質とか、恐怖の感情とか、取り越し苦勞の感情とかを捨てて朗らかな、明るい、愛深い、人を咎めない、赦しの深い、寛大な、平和な、落ちついた、角のない、円満な、自信のある、自分を神の子として神と一体であると信ずる心を養成すればよいのであります。これだけの心の準備ができるならば、自分の周囲にどんな不幸な事件が起こつて来ても、自分だけはその不幸な事件の映画俳優の一座に加えられず、一緒に不幸の分け前を味わわねばならぬようなことはなくなるのであります。こう申しますと、なかなか複雑な種類の心の修養をしなければならぬようで、この忙しい世の中に、とてもわれわれには実行できそうでないと思われる方もあるかもしれませぬが、これを一つの根本原理に還元しますと、決してこの修養は皆さんの想像されるほどは複雑なものではないのであります。この修養の根本原則とは、「自己が神の子であつて、自己の生命は神の靈である」との事実を目覚めることであります。この事実を目覚めるときわれわれは心の根本において神の無限力に生かされていることを感じますから、おのずから心が朗らかになり、明るくなり、寛大になり、愛深くなり、円満な、平和な、恐怖心のない、取り越し苦勞をしない人間になり、したがってどんな不幸も自分の側を素通りして近づくが、幸福ばかりが引き寄せられて来る心的磁石となるのであります。では、「自己が神の子であつて自己の生命は神の靈

である」という事実が目覚めるにはどうしたらよいかという一つの秘訣を申しますと、常に言葉の力で「わたしは神の子である」という思想の種子^{たね}を自分の心に植えつけるようにするのであります。道を歩く時にも「神の子が今歩いている」と低声^{こゝろ}でいって、その言葉のとおりに思っ神聖な罪にけがれない「本物の自分」を心に印象するようにします。往復の電車に乗っている小さな暇を利用して「私の真性は神である。神こそ本当のわたしである。だからわたしは恐れない」と自分だけに聞かせる声で自分自身にいつて聞かせます。人に面会する前にも「わたしは神である。神がわが父である。父と子とは一体であるからわがなすは父がなし給うのだ」と言葉に出して数回繰り返して自分にいつて聞かせて心に自信力を植えつけてから会うようにします。すると、その一回の面会には失敗してもだんだんに面会するのに自信ができ、やがてはすばらしく成功するようになれます。結果を急いではなりません。要するに「神と我とは父と子との関係であつて自分は神の無能力に後援されている」という意味のことばを、暇あるごとに。機会あるごとに、言葉の力で、自分自身の心の奥底にたたみこむようにするならば、この自覚の深まるにしたがつて運命が開けてくるようになります。神我一体の真理がいよいよ深く心の底に目覚めて、心全体が照り輝くようになりますと、「類をもつて集まる」の心の法則によつて、どんな時にも明るい運命ばかりが自分に吸い寄せられて来るようになります。もう前途の予感力が欲しいなどという欲望もぜんぜんなくなってしまうのであります。なぜなら、もうその人は運命に対して不死身となり、何事が起ころうとも自

分にとつて悪いことは一つとして起こらないとの大確信に到達するからであります。確信は「念^{こころ}の世界」における運命のひな形で、この世の出来事はすべて、このひな形のとおりに出てくるのであつて、悪い確信をもてば運命が悪くなり、善い確信をもてば運命が善くなることは免れがたい事実なのであります。

生命の實相 谷口雅春 日本教分社